

## 書評 Book Reviews

## マダガスカル動物—その華麗なる適応放散—

山岸哲編 裳華房 4,200円.

動物好きにはあこがれの地であるマダガスカル島の動物たちを知るための良い入門書である。気候と植生に続き、原猿類、そのほかの哺乳類、鳥類、爬虫類、両性類の分類と生態がかなり詳しく紹介されている。この本を読んだらマダガスカルに行きたくなるし、この本を読んでから旅行したら、数倍楽しくなることまちがいない。テレビでおなじみのワオキツネザルやカメレオンにも会いたいし、もちろん、長い上くちばしを樹の割れ目につっこんで虫をさぐるハシナガオオハシモズも見たい。カワウソやハリネズミの格好をした食虫類テンレックとはどんないきものなのだろうか。それよりも、あの絶滅した巨大走鳥類エビオルニスの子のかけらが見つかるという浜辺に立ってみたい。

なぜ、この島は多くの生物学者の注目をあつめ、たくさんの観光者がおとずれるのか？この本では二つの理由を上げている。ひとつはこの島だけにしかない固有種がきわめて多いからである。爬虫類、両性類、魚類では90%以上、哺乳類の80%以上、移動性が高い鳥類でも50%程度が、マダガスカル特産の種である。世界の動物相の区分けを習ったとき、この島をふくむ非常に狭い範囲がマダガスカル区として特別に扱われていたことを思い出す。シーラカンスが住むコモロ諸島や今は絶滅したドードーが住んでいたモーリシャス島は、この島の目と鼻の先である。この島に固有種が多いのは、この島が1億6千万年前にアフリカ大陸から大陸移動によって隔離され、その後大型捕食者がいないという絶好の環境で適応放散のプロセスが進んだためだといふ。

ただ、欲を言えば、この本の編集の基本方針のひとつである適応放散について、記述はくわしいがそのとりあつかいは少々物足りない。ある隔離された地域で偶然に少ない分類群がいかにして必然的にはほかの地域でもみられるギルドを占めてきたのか、という大問題を解くためにマダガスカルでの研究がどう進むのか、マダガスカルのアオストラリアやガラバゴスとは違う独自性（森林性鳥類が多く、ギルドを占めていることや固有種の多さ、隔離期間が長いことなどはそうであろうか？）がどのようにこの問題にからむのか、などの強力な問題提起はなされていない。

もうひとつ、この島が注目をあつめる理由は、絶滅の危機に瀕している種類が多いからである。体重200 kgにも達する種を含む大型原猿類15種と世界最大だったとべない鳥エビオルニス7種が、人間や人間がもちこんだイヌによる捕食圧によって、平安時代のころまでにこの世から姿を消している。さらに、人間が移り住む前は島の80%が原生林だったのに、現在はたった7%にすぎず、それも年間15-30万ヘクタールの速度で減少しているといふ。これが、レッドリストに45種もの鳥類が指定されている大きな原因らしい。これらふたつの理由、固有でしかも絶滅の危機に瀕している種が多いことから、この島は生物多様性ホットスポットの筆頭に上げられている。

では、わたしたちはどうしたら良いのだろうか、というのが本書のもうひとつのテーマである。私たち、というのは、生物学者たちであったり、動物愛好団体であったり、観光旅行者であったり、この本を読むであろう、皆さんひとりひとりであったりするだろう。マダガスカル政府はむろんのこと、各国の公的団体やNGOが精力的にこの島の保全にとりくんでいる様子がよくわかる。保全には人口抑制と家族計画問題、森林政策、貴重な動植物資源の保護とエコツーリズムが柱となっているようである。基礎研究やモニタリング体制もきちんととられており勉強になる。エコツーリズムは保全が直ちに観光収入につながるのだからわかりやすい。むろんその収入はその地域の保全活動のごく一部しかまかなえないだろうが、教育効果はとて高いだろう。ツアーガイドがもつ甲虫のスケッチに詳しい書き込みのあるノートの写真が印象的である。

(綿貫 豊)